

令和 3 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属視覚特別支援学校	校長名	星 祐子
幼児・児童・生徒数（R4.3.1現在）	170	学級数	37
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<p>本校は、視覚に障害がある幼児・児童及び生徒に対して、障害を克服し、人間として調和のとれた発達を図り、積極的に社会に参加し貢献することができる人間を育成することを目標とする。</p> <p>そのため、幼児・児童及び生徒の有する感覚を有効に活用し、個人の自主性と個性を尊重して、社会生活における自主的な思考力・判断力並びに積極的な行動力を養い、自主的に社会に参加していくための知識・技能・態度及び習慣を養うことを基本方針とする。</p>		
② 学校経営方針	<p>1) 3つの拠点構想（先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点）に基づき、視覚障害教育を担う附属学校として、専門性の充実・発展、教育実践成果の発信に努める。</p> <p>2) 大学や他附属、関係機関等と連携して特別支援教育を推進する。</p> <p>3) 教科指導、自立活動の指導、生活指導、進路指導等を充実させる。</p> <p>4) 安全で安心して学習・生活のできる環境の整備を図る。</p> <p>5) 保護者や地域住民の協力を得ながら、開かれた学校づくりを目指す。</p>		
③ 重点目標	<p>1. 個々の幼児・児童・生徒の実態や課題に応じた指導について、学部科を超えた専門性に基づく協力、他機関による連携などを通して、その充実と発展を図る。</p> <p>2. 点字による指導や授業実践に加え、弱視教育における専門性を高め、インクルーシブ教育に役立つ発信力を備える。</p> <p>3. 盲ろう分野における有効な指導方法を実践の中で見出し、他機関との連携の下、本校のセンター的機能を高める。</p> <p>4. オンラインを含めた国際交流活動の実践事例を積み重ね、国際的素養を高める教育活動を展開する。</p> <p>5. 学校、寄宿舎、家庭の三者間の連携を密にした生徒指導を充実させていく。</p> <p>6. 大学等と連携し、教育実習・臨床実習・職場実習等の取り組みの充実を図る。</p> <p>7. 継続して、働き方改革に取り組み、業務の効率化を図る。</p> <p>8. 附属学校の将来構想における本校の存在意義と社会的ニーズに応える役割について、組織再編等と関連させた具体的検討を進めていく。</p>		
④ 前年度（令和2年度）の成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・大学を始めとする関係諸機関と連携して、研究協議会、研修会を実施し、授業研究などを通して、幼児・児童・生徒の実態に即した教育実践に努めた。 ・コロナ禍の中、対面だけでなくオンラインを活用しての授業実践、また、遠隔による教育相談・支援を行った。 ・担任、主任、生徒指導部、養護教諭、寄宿舎、SC・SSW等と連携して情報を共有し、組織的な生徒指導を展開することができた。 ・ミニ研修会を定期的に開催して、他教科・他部科の取り組みから互いに学び合う取り組みを導入し、さらに「視覚障害教育ブックレット」を継続的に発行して、教育実践・情報の発信に努めた。 ・職業課程では留学生を受け入れ、さらに、高等部ではタイの視覚障害者支援クリスチャン財団とオンラインによる交流を実施し、コロナ禍でも国際交流教育に取り組むことができた。 ・大学・附属学校連携小委員会を定期的に開催し、人間系障害科学域や附属学校教育局との連携協力を図るとともに、学生の調査・研究、教育実習に協力した。 ・ワークライフバランスの観点に基づき、時間外労働削減に向けた具体的検討を始め、職員の意識改革を図った。 ・個人情報管理やハラスメント防止等に関する啓発活動を行い、スクールコンプライアンスに対する職員間での意識を高めた。 ・体育館脇に手洗い場を設けて、感染防止対策の改善を図り、寄宿舎では安全管理の観点から防犯カメラを導入した。 ・職業課程の定員未充足課題について、現状把握に基づく意識改革を図り、一部の学部科における将来的な廃科を検討し、その行程表を作成した。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学部を中心に、外部支援によるインクルーシブ教育の拡充を図ることができたが、その成果を他学部に広げていくための教育支援の在り方や実践共有の方法について ・GIGA スクール事業の本格化に向けた視覚障害教育における ICT の活用、情報活用能力を引き出す教育内容の見直しと発信について ・働き方改革に伴う業務の効率化、業務内容や教育活動の精選について 		

3 重点目標達成についての総括的評価

1. 個々の実態把握や課題に応じた指導の充実等

学習状況や授業の理解度を共有し、必要に応じて個別に補習を行い、定期的な面談を実施することで、生活面、学習面において、指導の充実を図った。心理面では、養護教諭、スクールカウンセラーと連携し、心の安定を保つための個別対応に努めた。重複障害のある幼児・児童には、行動観察、多角的な評価から、実態把握を行い、指導目標や指導方法を教員間で共有し、見通しをもった教育活動を展開した。

2. 指導の専門性と弱視教育

校内で、弱視教育の実践と課題に関する研修会を10回実施し、外部の専門職による講話や校内での指導実践を共有した。インクルーシブ教育システムにおける外部支援の一環として、弱視教育のQ&Aをホームページに掲載する準備を進めることができた。

3. 盲ろう教育の充実と発信

教育局の研究プロジェクト及び文部科学省の委託事業と連携し、幼稚部・小学部における盲ろう幼児・児童の教育実践を公表し、盲ろう領域における本校のセンター的機能を高めることができた。

4. 国際交流活動

タイの国際交流協定校と年3回のオンライン交流を実施し、異国の文化や教育内容について、活発な意見交換を行い、国際交流を深めることができた。

5. 生徒指導の充実

心のセルフケア研修会、LGBTQに関する学習会を実施し、多様な背景をもつ幼児・児童・生徒、及び保護者に適切に対応する取り組みを進めた。また、養護教諭を含め学校、寄宿舎間での連携、スクールカウンセラー等との定期的な情報共有により、組織的対応力を高めることができた。

6. 教育実習等における大学との連携

コロナ禍による制約のもと、本学及び理療科教員養成施設などから対面での教育実習生を受け入れ、教師教育拠点として本校の指導実践を共有し、研究授業を行う場を提供できた。

7. 働き方改革

ノー残業デーの実施、教育活動の見直し、職員の勤務管理における意識改革に取り組んだ。前年度と比べ、長時間労働は確実に減っているが、業務の効率化などにおいて継続した取り組みが今後必要である。

8. 将来構想と組織再編

定員未充足に対して、専攻科音楽科及び専攻科鍼灸手技療法研修科の廃科時期を決定し、周知を行った。また、学級数減の検討を進める学部科では、校内での調整を図った。盲ろう教育の充実、早期教育の取り組み、教科・領域、及び職業教育での視覚障害教育の専門性と発信については、今後も社会のニーズに応じていくことが求められる。

4 令和4年度の学校課題

1. 将来構想に基づく組織の見直しと学部科内の連携

2. 多様な障害への対応、個々の実態や課題に応じた指導の充実

3. インクルーシブ教育システムにおける外部支援の充実と情報発信

4. 法令遵守における職員意識の向上

5. 働き方改革への継続した取り組み

6. アクセシビリティに配慮したICT教育の推進と指導実践の蓄積

7. 地域との連携に基づく協働的学習等の取り組み

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

1. 組織再編と校内連携

先導的役割を踏まえた将来構想の検討、人事交流の拡充、学部科を越えた教職員の相互協力

2. 多様な障害への対応、個々の実態や課題に応じた指導の充実

行動観察やアセスメントに基づく実態把握、教材の工夫、盲ろう教育における指導実践の蓄積

主体的・対話的で深い学びに基づく指導の充実

3. 外部支援の充実と情報発信

早期教育支援による視覚障害乳幼児及び保護者への支援、

幼稚園や通常の学級等に在籍する視覚障害のある幼児・児童・生徒及び指導に係わる教職員への支援、情報発信

4. 法令遵守への取り組み

ハラスメント防止、体罰禁止、いじめへの早期対応、個人情報保護、LGBTQ への配慮における啓発、研修会の実施

5. 働き方改革の推進

ワークライフバランスの実現に向けた職員の意識改革、業務内容や会議時間の見直し、

相互協力しやすい職場環境づくり

6. ICT 教育の推進

学部科を越えた ICT 教育の充実に関する教育プログラムの検討と指導実践の共有

アクセシビリティに関する知識・基本技術における全職員間での情報共有と理解促進

7. 地域との連携

地域の企業や公共施設などと連携した外部講師による授業づくりや職場体験等の協働的学習、

及び地域住民との交流を深める企画

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

・研究紀要 第 53 卷

・『視覚障害教育ブックレット』Vol.46～48 の発行 ジアース教育新社

・『視覚障害者のためのスポーツ指導』共著 筑波大学出版会

・日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.143 P.98～107

「特別支援教育における社会科授業に社会参画の視点をどう取り入れるか」（著：丹治達義）

・月刊誌『視覚障害』

11月号 P2～10「気付かれなかったヒヤリハット—視覚障害者のホーム転落事故をなくすために—」

（著：宇野和博）

12月号 P25-34「視覚特別支援教育の場 全日盲研析木大会研究発表① 文学作品の読解指導の

実践例—演劇的手法を用いたコミュニケーションワークショップを通して—」（著：皆川あかり）

・理療教育研究第 4 4 卷 P19～27

「共生社会の推進に向けた理療科における交流及び共同学習の実践」（著：工藤滋 他）

学 校 評 価 （ 自 己 評 価 ） 報 告 書 （ 項 目 別 表 ）

令和 3 年度

学校名

筑波大学附属視覚特別支援学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-7	コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業の状況	<p>コロナ禍の中、オンライン対応で授業を継続するための機器・通信環境の整備を行うことができた。点字使用生徒は、音声だけでなく、点字ディスプレイを有効に活用して、調べ学習や発表の場で活かすことができた。弱視生徒は、拡大や白黒反転などのアクセシビリティ機能を利用して、自分で見やすい環境を整える力を高め、ICT 機器を授業で効果的に活用することができた。</p> <p>コンピュータリテラシーは個人差が大きいいため、中学部だけでなく小学部段階から教育的効果が得られる場面では、ICT 機器の活用頻度を高める取り組みが求められる。</p>
2-1-8	職場体験活動や就業体験活動の実施の状況	<p>小学部や中学部を中心として、将来の自立に必要な知識、技術、態度を理解し、適切な職業観の育成を図るために、近隣の企業等と連携しながら、職業体験活動に取り組むことができた。障害ゆえに希望する職業を諦めるのではなく、卒業生の活躍を直に聞く場を設けることで、ロールモデルを参考にした主体的な職業選択や将来に向けての目標づくりに、積極的に取り組むことができた。コロナ禍のため職場訪問に制限を伴うことがあったが、オンラインによる業務についても、昨今の働き方と関連付けて、全体の取り組みに活かせることを、今後は検討できると良い。</p>
3-1-5	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等との連携協力による教育相談の状況	<p>スクールカウンセラーによる教職員研修、中学部や高等部での生徒向け講話などを通して、学校と心理専門職が連携しながら、組織的な対応を行うことができた。今後も、継続して、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの定期的な情報共有から、個別対応が必要な児童・生徒に対する早期支援を展開していけるように、連携協力を深めていきたい。</p>
6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>附属学校間で、オンラインによる交流を実施したが、今年度は中学部において2校間だけでなく、3校合同で取り組むことができた。また、小学部での副籍交流希望者は、居住する地域の小学校に登校し、共同学習を行うことができた。今後も、共生社会の実現に向けて、支援する側、される側という固定された関係ではなく、互いに協働しながら作り上げる企画や活動を通して、真の共生につなげていくことが望まれる。</p>
14-1-2	大学との連携・協力	<p>本学および理療科教員養成施設の学生を教育実習生として受け入れた。また、総合的な学習における時間の指導法や障害科学域の講義を担当することで、視覚障害教育の指導実践を大学生と共有することができた。</p> <p>が、今年度はコロナ禍もあり実施できなかった。今後は、情報システム系に限らず、本校を研究フィールドとした共同研究に至る取り組みを模索していくことが望まれる。</p> <p>昨年度は、情報システム系研究室とのアクセシブルデザインに関する情報交換を行うことができた</p>

14-1-3	先導的教育研究	<p>盲ろう教育において、教育局のプロジェクト研究及び文部科学省の委託事業と連携しながら、幼稚部・小学部の指導実践を蓄積し、その成果を発信することができた。また、2020 東京パラリンピックに出場した在校生・卒業生によるパラ報告会の開催等によるオリパラ教育に取り組んだ。</p> <p>地域の企業と連携した協働的学習として、金融教育を高等部の授業で展開することができた。</p> <p>高度な点訳業務に関連して、文部科学省による点字教科書編集への協力、英語試験（英検、TEAP、GTEC）、数学検定、全国学力・学習状況調査等の点字試験に関わる協力を行った。</p>
14-1-4	教員養成・教師教育	<p>本学や理療科教員養成施設と連携しながら、対面での教育実習を行うことができた。</p> <p>免許状更新講習では、コロナ禍のためオンラインによる実施となったが、附属学校実践演習を含め、本校で4講座開講することができた。</p> <p>視覚障害教育研究協議会、理療教育研究セミナーをオンラインで開催し、盲学校間での小学部遠隔合同授業の取り組み、高等部朗読劇発表会の取り組みなどの教育実践を発表することができた。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>小学部児童が職業教育課程に在籍する留学生（キルギス、中国）と交流する活動を通して、異国の文化や慣習に対する関心を高めることができた。</p> <p>高等部生徒が、タイの国際交流協定校と、年3回のオンライン交流を実施し、異国の文化、情報機器とアクセシビリティの状況などについて活発な情報交換を行い、国際交流を深めることができた。</p> <p>トビタテ！留学JAPANによる短期留学を希望し、複数名が合格したが、コロナ禍のため残念ながら渡航を諦めざるを得なかった。今後も異文化への関心を高め、海外で学ぶ機会における情報提供と支援を継続したい。</p>
14-1-6	社会貢献	<p>専攻科3科が筑波大学社会貢献プロジェクトによる共生社会の形成を意識した取り組みを行った。また、鍼灸手技療法科治療室での鍼・きゅう・マッサージ施術における近隣患者の受け入れ、地域住民を対象とした音楽科によるコンサート、近隣図書館との連携による視覚障害関連図書コーナーの特別設置、夏休みの地元町会ラジオ体操開催における校庭開放などを行った。</p> <p>今後は、地元町会と災害時応援協定に基づく相互理解の促進を図る上で、継続的に意見交換と協議を実施したい。</p>